

研修報告書No.12

所 属：東京大学医学部附属病院 研修医
研修先：本山町立国保嶺北中央病院
高知市土佐山へき地診療所

私は平成 28 年 12 月の 1 ヶ月間、本山町立国保嶺北中央病院、高知市土佐山へき地診療所で研修させて頂きました。また研修期間中には大川村診療所、黒丸診療などの診療所や無医地区での診療も経験しました。

本山町立国保嶺北中央病院は 100 床を持つ嶺北地区基幹病院であり、主に入院患者の管理、救急外来の担当、内科・外科外来の見学などを研修しました。普段の研修と最も違うと感じたことは、高齢の患者が多く、どこまで治療するかということが非常に難しいということです。生活の中での外来受診であり、生活に向けての入院加療である事を意識しないと、病気は治ったものの患者本人は弱ってしまい元の生活環境には戻れなくなることや、外来で処方していても患者が理解していないと内服できていないこと等が起り得ます。そういった状況にならないように、家族に協力を仰いだり、本人の QOL を極力損なわないような外来・入院加療を行ったりすることが大切であると感じました。

また高齢で独居の方や老老介護の家庭も多く、そのような患者が治療後いかに家庭で過ごしていくか、そのためにはどのような社会資源を投入する必要があるか等といった、社会福祉についても学ぶ機会が多く、考えさせられる研修となりました。今後より高齢化が進んでいく日本社会では、介護保険の主治医意見書を提出することや、その介護保険を用いてどのようなサービスの導入をしていくかを考えることが、医師としても多くなると思います。このような社会資源についても、医師として一定以上の知識が必要であると痛感しました。またそのようなサービスをスムーズに導入していくためにも、他の医療従事者について理解し、連携していくことがより大事となると感じました。

土佐山へき地診療所では、市内への交通の便が悪く、高齢の方が多く区内での移動も難しいといった悪条件の中でいかに診療していくか、について研修しました。診療所は市内や他の病院から遠く、また地域の住民数も少ないため、従事する医療関係者や医療物資が限られており、なかなか十分な医療サービスを提供することが難しい状態でした。その中で地域の住民の健康を守るためには、まず患者との信頼関係をしっかりと築くことが大切であると気付かされました。へき地診療では患者にとって医者はその人 1 人だけであり、信頼関係が築くことができず受診しなくなることは、医療機関の受診を全くしなくなることと同義であり、その後の患者の QOL を大きく変えてしまうこととなります。まずは患者一人一人に信頼され、地域に信頼される医師になることこそ、地域診療の最も重要なことだと感じました。その上で、出来る限りの医療資源で患者と相談しながら診療を行い、緊

急性や重症度の高い患者を見分けて早めに他院に搬送するといった医師としての技術が成り立つのだと思いました。

大学ではあまり意識する機会がなかった医療費の問題についても考えさせられることが多くありました。個人のレベルでは貧しい地域ではお金のある患者ばかりではなく、薬剤でもコストを考えて選ぶ必要が有ることや、診療所のレベルでは、一定以上の患者数がなければ費用対効果を考えると院外薬局を設置することが難しいことといった、医療費にまつわる限界も経験する事ができました。国として医療費は経済を圧迫する状態になっており、今後はこのような費用の面でも考慮し診療する必要があると感じました。

地域研修を通して、大学病院での研修では学べないような医療の方法、問題点を学ぶことができました。今後は高齢化に伴い相対的に医療過疎となる地域も多く生じてくるため、都心で医療に携わるとしても考えなければならない問題となってくると思います。今後医師として診療していく上で、必要となる知識や考えなければならない問題点を感じる事ができた実りの多い研修となりました。